

2024年2月18日

四旬節第1主日

菊地功大司教 メッセージ

マルコ福音は、イエスの物語を、簡潔に、洗礼者ヨハネから洗礼を受けられた話ではじめ、そして荒れ野における40日の試練の物語と続けています。この簡潔な荒れ野の試練の物語のなかで、福音は三つのことを伝えようとしています。

まず第一に、イエスは聖霊によって荒れ野へと送り出されました。荒れ野とは、普通で安全な生活を営むことが難しい場であります。いのちを危機に陥れるありとあらゆる困難が待ち構えていることが容易に想像できるにもかかわらず、イエスは聖霊の導きに身をゆだねました。聖霊の働きと導きに恐れることなく完全な信頼を寄せるイエスの姿勢が記されています。

そして第二に、40日にわたって荒れ野でサタンの誘惑を受けられたと記されています。逃げ出すことが出来たのかも知れませんが、しかし聖霊の働きと導きに完全に身をゆだねたイエスは、困難に直面しながらも、御父の計画に信頼し、その計画の実現のために配慮される御父への信頼のうちに、希望を見いだしていました。

三つ目として、イエスは荒れ野での試練の間、人の命を脅かす危険に取り囲まれながらも、天使たちに仕えられていたと記されています。すなわち困難に直面する中で、聖霊の働きと導きに身をゆだね、御父の計画に信頼を置くものは、神の愛に基づく配慮に完全に包み込まれ、それがために命の危険から守られることが記されています。

荒れ野での40日間の試練は、身体的な困難を乗り越えただけではなく、また心の誘惑に打ち勝ただけではなく、信仰、希望、愛を改めて見だしそれを確信し、そこから力を得た体験です。信仰、希望、愛に確信を見いだしたとき、イエスは福音を宣べ伝えるためのふさわしい「時」を見いだしました。

四旬節は、わたしたちが信仰の原点を見つめ直し、いつくしみに満ちあふれた御父の懐

にあらためて抱かれようと心を委ねる、回心の時です。わたしたちも、信仰、希望、愛に生きている自分の信仰を見つめ直すことで、神のあふれんばかりの愛といつくしみのうちに生かされていることを改めて確信し、その確信に基づいて、この世界で福音をのべ伝えるためのふさわしい「時」を見いだすよう招かれています。

そのために教会の伝統は、四旬節において「祈りと節制と愛の業」という三つの行いで、自分の信仰の振り返りをするように呼びかけています。また四旬節におこなわれる献金は、特に教会共同体の愛の業を目に見えるものとする象徴です。日本の教会では、四旬節の献金はカリタスジャパンに送られ、国内外の愛といつくしみのための業に使われていきます。

みなさん、この40日の期間、互いに支え合う心をもって、愛の業のあかしの内に歩み続けましょう。わたしたちの信仰は知識だけで終わるものではありません。